

# 仙台市富沢駅西土地地区画整理事業に伴う 富沢館跡・川前遺跡ほかの発掘調査成果について

仙台市教育委員会文化財課

## 1. 調査要項

調査原因：仙台市富沢駅西土地地区画整理事業

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

国際文化財株式会社

## 2. はじめに

仙台市富沢駅西土地地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成 25 年から事業地内に所在する富沢館跡・川前遺跡・鍛冶屋敷前遺跡・鍛冶屋敷 A 遺跡・鍛冶屋 B 遺跡・宮崎遺跡・六本松遺跡・京ノ中遺跡の計 8 遺跡を対象に発掘調査を行ってきました。今年度は、川前遺跡と宮崎遺跡、そして富沢館跡(3 年次)の発掘調査を行っています。

区画整理事業の施工に伴う大規模な発掘調査は今年度ではほぼ終了します。今後は、事業地内での建築計画に伴う発掘調査を行っていくこととなります。今回、これまでの調査成果について、市民の皆様に紹介させていただきます。

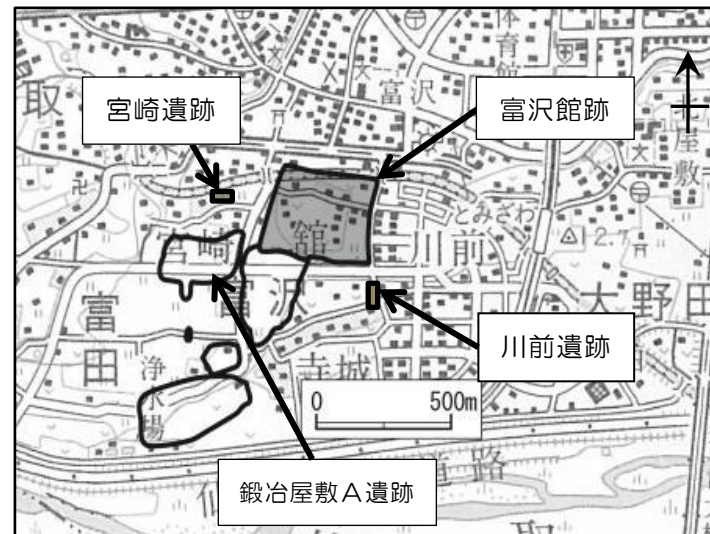
## 3. 今年度の調査成果について

### (1) 富沢館跡

富沢館跡は、仙台平野に残る中世の館跡としては最大のものとして、江戸時代には、仙台藩士の生田家が伊達氏から館跡を拝領し、在郷屋敷として使用していました。平成 25・26 年に、土塁の測量調査と土塁に囲まれた館跡内部の調査を行いました。館跡内部の北西に現存する土塁の規模は、全長約 140m、幅約 13m、高さ約 2m ほどあり、「く」の字状に曲がっています。

今年度は土塁の積土の一部を取除き、構築状況の確認と基底部の調査を行ったほか、外郭の推定外堀位置で調査を行い、西部と南部、東部に掘られた堀跡を確認しました。外郭の調査では、西部で南北方向に伸びる幅 5~10m、深さ 2m 前後の堀跡 4 本を確認し、南部では蛇行しながら東西方向に伸びる幅 10m 前後、深さ 2m 程の堀跡 2 本が確認されました。また、東部でも南北方向に伸びる幅 8m 前後、深さ 2m 程の堀跡 2 本を確認しました。現時点では、これらの堀跡の年代を決定できる遺物が出土していないため、確認された堀跡がすべて同時期のものになるのか、それとも時期差があるのかについては検討が必要です。

また、館跡南東部の調査では、約 3500 年前の縄文時代後期中頃の遺物包含層と竪穴住居跡 1 軒・埋設土器等を確認しました。



遺跡位置図



富沢館跡土塁空撮(北西上空から 平成 26 年撮影)



富沢館跡西部堀跡(南東から)

※「遺物包含層」 縄文人が使用した土器や石器などの道具類が集中して含まれている土層。集落の周辺の窪地などに、壊れたりして使わなくなった土器などを廃棄した場所。

\*「埋設土器」 ほぼ完全な形の土器を、穴を掘り埋めているもの。埋葬に関わる施設の可能性があります。

### (2) 川前遺跡

富沢小学校の北にある川前遺跡の調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡 3 軒と、約 3400 年前の縄文時代後期後半から約 2500 年前の晩期中頃の遺物包含層が確認され、土器や石器などが多量に出土しました。このことから、川前遺跡では長い間、縄文人の集落が営まれていたことが分かりました。

特に、調査区の南側では、遺物包含層の一部が盛り上がっている状況が確認されました。この範囲では、土器が集中出土していて、包含層の一部が 19 層にも細分できたことや、出土した遺物の中に、石刀・土偶・岩偶・岩版などの特殊な遺物があることから、この場所で祭祀的な行為が繰り返されていた可能性が考えられます。

調査期間中、富沢小学校 6 年生を対象に縄文土器の説明会と遺跡見学会を行いました。実際に出土した土器や竪穴住居跡について説明して、身近にある郷土の歴史に触れてもらいました。



縄文時代後期の竪穴住居跡(川前遺跡 東から)  
住居跡の大きさは約 3m 奥に見える円形の炉跡は径 60cm



富沢小学校遺跡見学会(川前遺跡)

### (3)宮崎遺跡

宮崎遺跡からは、約 1100 年前の平安時代の竪穴住居跡 1 軒・土坑 1 基・小溝状遺構群・溝跡等が確認されました。竪穴住居跡からは、ロクロ土師器と須恵器が出土しています。小溝状遺構群は、重複状況から竪穴住居跡よりも新しい時期のもので、堆積土には、10 世紀前半(915 年)に十和田湖周辺から噴出した灰白色火山灰が含まれています。

※「小溝状遺構群」 細長い溝が、同一方向に一定の間隔で並んでいるもので、畑の耕作に伴う痕跡と考えられています。



小溝状遺構群 (宮崎遺跡 東から)

## 3. これまでの調査成果について

### (1)鍛冶屋敷A遺跡

西側に隣接する鍛冶屋敷前遺跡とあわせて、平安時代の竪穴住居跡や鍛冶生産に関連する遺構などが発見されています。文字の刻書された砥石は、9 世紀頃の竪穴住居跡から出土しました。

長さ 15 cm ほどの砥石の 3 面に、古代の上申文書の一部や、氏名(うじな)と考えられる「大田部」、上野国(現在の群馬県)を指す可能性のある「上野」などの文字が刻まれています。今のところ、刻書砥石の出土例は、群馬県内の 2 点程度で、うち 1 点は 9 世紀後半の遺構から出土しています。出土状況や年代に共通点があり、砥石に刻書する行為に関して地域性があることも考えられます。



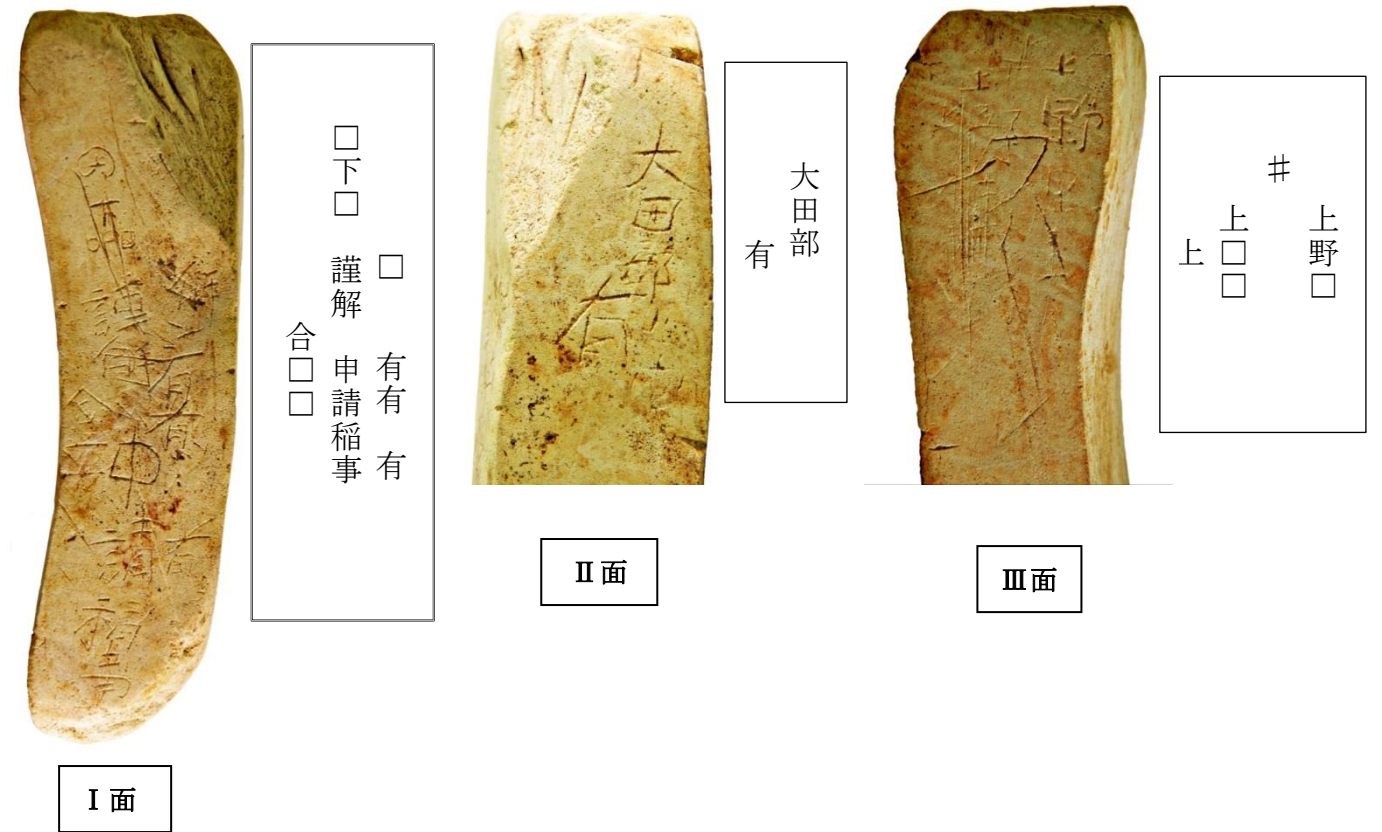
砥石が出土した平安時代の竪穴住居跡  
(鍛冶屋敷A遺跡 北西から)



刻書砥石出土状況

### (2)鍛冶屋敷A遺跡から出土した文字が刻まれた砥石について

文字の刻書された砥石は、平安時代の竪穴住居跡南側の床面から出土しました。この砥石の 3 面に文字が刻まれています。



最も多くの文字が刻まれていた I 面には、「謹解 申請稲事 合」【書下し：謹んで解し申し請う稲の事 合わせて…】(つつしんでげし もうしこう いねのこと あわせて…) とあります。これは古代の上申書の書式であり、定型化された書式が古代の地方社会にも広く知られていたことを意味します。

II 面には「大田部」と刻書されています。「大田部」(おおたべ) は氏名(うじな)であると考えられ、東日本では安房、常陸、陸奥、出羽などに分布が確認できます。このことから「大田部」は、もともとは東国から移住してきた集団である可能性が考えられます。(III面に「上野」という文字が見えることから、上野国とかかわる可能性も考えられます。)

III 面には「上野」という文字が確認できます。「上野」は、「上野国」(現在の群馬県)を指す地名を意味している可能性もありますが、下に「国」の字が確認できないので、郷名などの地名や、人名の一部である可能性もあります。また、上部に、小さく「#」と書かれているのが確認できます。「#」は、墨書土器などに多く見られる、まじない記号(魔除け符号)であると考えられます。

【国立歴史民俗博物館 三上喜孝准教授にご指導いただきました。】